

「ジェイン・エア的成長小説」についての考察

I

「ヴィクトリア朝の小説家の特徴は教育を受けず、力量が不十分で思いつきが多いことである。その結果、シャーロット・ブロンテの本は支離滅裂で辻褃のあわない人物の羅列である」という意味のことをデイヴィッド・セルは述べている。⁽¹⁾しかし、シャーロット・ブロンテは綿密な構想と意識的な技巧を駆使して『ジェイン・エア』を写稿として努力したと言っても言い過ぎにはならないだろう。先ず最初に、その跡を辿ることからこの小論を始めたいと

思う。シャーロット・ブロンテ自身、作品を書きたいと思う激情が怒濤のように彼女を襲うのを感じていたことは間違いない。彼女自身の言葉がそれを証明してくれている。

滝 裕 子

作家がとてもうまく、あるいは少なくとも非常にすらすらと作品を書く時には、一つの影響力が作家の中で目ざめているように思われます。その力は作家を支配し、思い通りにし、その命令以外のすべての命令を無視してある言葉を指示し、その言葉が激しいものであれ控え目なものであれ、それを使用するように主張します。新しく形づくられる人物は事件を思いがけない方向に向かわ

せ、注意深く苦心して作り上げた以前の考えを拒否して、突然新しい考えを創造し、採用するのです。(2)一八四八年一月十二日リス宛)

シャーロット・ブロンテの言うこの「力」とは作家が作品を書きたいという衝動であって、思いつきや支離滅裂な人物作りとは違はずである。シャーロット・ブロンテについて第一に私が言いたいのには、『ジェイン・エア』において彼女は巧みにその力をコントロールしながら非常に用意周到な作品を作り上げたことである。そして、第二に『ジェイン・エア』は文学史上女性によって書かれた初めての教養小説である。彼女は『ジェイン・エア』を敢えて女性によって語られる成長小説とすることによって、女主人公が成長していく姿を通して、当時の女性に社会が要求している、こうあるべきだという義務付けに対抗したのである。彼女は控え目で献身的で結婚を人生の第一目的とし、家庭を守るべきであるという「ヴィクトリア人の文化の足かせを緩やかに解き放した。心の奥の意識を表現し、新しい女性の理想像を作り出した」(3)。ジェイン・エアがソーンフィールドに家庭教師として就職して、その仕事に飽き足

らず、「現在持っているよりも、もっと多くの実際的な経験を欲し、自分のような種類の人たちと、ここで接しているよりももっと多くの交際を持ち、もっといろいろな性格の人たちを知りたいという願いを持った」(十二章)とき、作者ブロンテが次のように、明らかに作者の言葉と思われ
る意見をそれも突然に挿入しているのは興味深い。

人は平穏な生活に満足すべきである、と言ってもむだなことである。人間は活躍の場を持ってはならない。そしてもしそれを見つけないことができなかったら自分で作り出すだろう。何百万人の人達が私よりもっと静かな運命の下にあり、何百万人の人が自分たちの運命に対して無言で反抗している。政治的な反逆の他にいかにも多くの反逆が地上の数限りない生活の中で発酵しているか誰も知らない。婦人というものは一般に大変おとなしいものであると考えられている。けれども、婦人もまた男性と同じように感じている。婦人もまた男性と全く同様に自分たちの能力を働かすこと、その努力を発揮できる分野を必要としているのである。婦人たちは男性たちと全く同じようにあまりに強すぎる束縛、余りにもひ

どい沈滞に苦しんでいるのだ。女性がブディングを作ったり、靴下を編んだりピアノを弾いたり、バッグに刺繍をしたりするためにじっと家に閉じこもっているべきであると言うのはずっと特権を持った男性の偏狭な心なせるわざである。もしも婦人の性にとって必要であると断定されてきた習慣よりもっと多くのことを行い、もっと多くのことを学ぼうと婦人たちが望んだとしても、彼女たちを非難したり、嘲笑したりすることは分別のあることではない。(十二章)

第三に、シャーロット・ブロンテは常に小説家としての自分の使命を意識し、と同時に大衆との関係も十分に意識に入れていた。

みなさんの前に私は男でも女でもない人間で、小説家ひとすじの道を歩んだ者として登場いたします。それがあなた方が私を判断して下さる権利の唯一の基準でありますし、あなた方の批評を私がお受けする唯一の基盤でもあります。⁽⁴⁾

彼女はプロの小説家である。それは彼女が書くことで生計をたてているという意味ではなく、自分自身を文学者としてみなし、自分の芸術的主張をはっきりと打ち出し、それを理解してもらおうという確固とした目的を持って小説を書いていたという意味である。従って、大衆が彼女の芸術にどのように反応するか彼女としては大いに気になるのである。また大衆を自分の芸術の中に引きつけていくためにはどうしたらよいか常に技巧を駆使していたのである。一定の間隔をおいて、「読者よ」という直接の呼びかけの挿入が入るのは読者の注意を引きつけていこうとする彼女独特の技法である。⁽⁵⁾ 家庭教師をしていたソーンフィールドを離れ、愛するロチェスターの元から逃れるとき次のように読者に共感を求めている。

優しい読者よ。そのとき私が感じたような悲しみを、あなた方は決して感じることはありませんようにと私は心から祈る。私の目から溢れ出た、あの激しい、にえたぎる、心をしぼるような涙を流すことのないように。(二十

七章)

読者に呼びかけることで読者の注意を巧みに喚起している。

また第四に、一人称の主人公が心の中を読者の前にさらけ出す内的独白の言葉が随所に見られる。

(おまえが)と私は言った。(ロチェスター様のお気に入りだつて? 行ってしまえ。おまえのばか加減には胸が悪くなる。それにおまえは、ときたまの愛顧のしるしを、名門の紳士で世情に通じた方が、使用人、それも新米に示すあいまいなしるしを示されて喜んでゐる。よくもそんな気になれたものだ! あわれな、まぬけのむく鳥め! (十六章)

シャーロット・ブロンテは決して感情に押し流されて彼女の小説を書き上げたわけではない。綿密に計算しその上で感情を投入して、読者の心を引きつけながら小説を書いたのである。「シャーロット・ブロンテは情熱を尊敬すべきものにした女性的アナキストである」と評した人もいる程である。

II

次に、私がこの小論において書きたいことは、では一体「ジェイン・エア的教養小説」とはどんなものであろうかという点である。この小説は孤児で家のない女主人公が三十歳のときに、十歳のときからの成長の記録を書いたものである。教養小説では主人公は自己成長の旅をすると同時に、自己実現を目ざし自分を探す精神遍歴をする場合がほとんどである。そして、多くは一個所にとどまらず、さまざまな人たちと出会い、いろいろな失敗や経験を重ねることによって、人間的成長を遂げるのである。『ジェイン・エア』の場合も、大きく分けて五つの場所を移動して、自己を高め成就していくことになる。先ず、ゲーツヘッド、次にローウッドスクール、そしてソーンフィールド、そして最後にファーンデーンで初めて安住の地を得ることとなる。

このように、はつきりと場所を移動する度にその時々⁽⁶⁾の成長を描いていくことも、「ジェイン・エア的教養小説」の一つの要素とならうが、加えて「ジェイン・エア的教養

小説」と言うことができるものの本質は一体何であったかということをごとこで改めて考えてみたいのである。結論から言ってしまうと、ジェインが主人公であるこの教養小説は一言で言ってしまうと、ジェインの自己を探す放浪の旅ではないということである。言いかえれば、ジェインの自我はすでに十歳のときから確固として存在していて、その自我を他の人々との関連において、いかにコントロールしたり、爆発させたり、発散させたりしていくかであって、不明瞭な自我の存在を抱えて、遂に自己実現を成しとげるといふ類の成長小説ではないということである。もともと確立している自我をいかに他との力関係によって主張し、ときに協調していくか——これが「ジェイン・エアの教養小説」の特徴と言えらると思う。彼女の個性はすでに小説が始まっているときから確固として存在しているからである。

『ジェイン・エア』はバニヤンの『天路歷程』を下敷にしているときよく言われている⁽²⁾。しかし、その内容はジェインという一人の女性の上のしかかるさまざま、彼女を押し閉じ込めようとする力と、その力を何とかしてはねのけ、脱出しようとする彼女自身の反抗力との抗争の遍歴と言えらるということである。彼女を押し閉じ込めようとする

力はそのときどきによって変化する。しかしその力を受け方の彼女の側にとってみれば、自分を圧迫し幽閉しようとする力はどれも同じにみえる大きな力である。その力が善意のものであれ悪意のものであれ、彼女にとってそのような圧する力の下では彼女の自己は窒息し、自由を束縛され圧死してしまうしかない。そのような結果にならないために、彼女は自由を求めて逃げていく。その遍歴が結果的に「ジェイン・エアの教養小説」と呼ばれるものである。

圧する力に反抗しそこから脱出しようとする闘いの一ページは彼女が十歳のときから始まる。ジェインは天涯孤独な孤児で、ゲーツヘッドで義理の叔母リード夫人の家族と一緒に住んでいる。しかし彼女の身分は決まっていとこ達と同等のものではない。それは次の引用からもわかる。

エライザやジョンやジョージアナは、いま客間でお母様のまわりをとり囲んで坐っていた。母親は燐火のそばのソファーに背をもたれ、自分のまわりにかわいい子たちをとり巻かせ、(というのはそのときは彼らはけんかも悪たれもついていなかったから) すっかり幸せそうだった。夫人は私を仲間はずれにして入れなかった。その言いつと

いうのは私を遠ざけておかなくてはいけないのは残念でたまらないけれど、私がおっと愛想のよい子供らしい性格で、もっと魅力的な元気な態度で、いわば何かもっと明かるい正直な素直な子供になろうと本気で努力していることをベッシーから聞くまで、あるいは自分自身の目で見るまでは、彼女は満足しきった幸せな子供たちだけが受ける特権を私には与えるわけにはいかないというのであった。(一章)

リード家においてジェインがいかに孤独であったか推察することができよう。しかし彼女は孤独を楽しむことも上手であった。一人ぼっちで本を読んだり、空想にふけったりするのが好きであった。しかし環境は彼女の唯一の楽しみも許してくれなかった。出窓で一人隠れてビウィックの英国鳥禽史を読んでいるところを、ジェインに対して「反感を抱いている」ジョン・リードに見つけられてしまう。「一週間に二、三回どこるか日に一、二度どころか、ひっきりなしに彼はジェインを「脅したりひどい目に合わせたりした。」四歳年上のいとこであるジョン・リードはジェインに「リード様何かご用でございますか」と言えと言

う。そして彼の悪口は次のように続く。

「僕たちの本を持ち出すなんて、おまえがそんなことをしていいのか。おまえはうちのやつかい者なんだと家のママが言っていたぞ。おまえのおやじはお前に一文も残しちゃくれなかったのさ。おまえは物乞いするのが当然なんだぞ。僕たちみたいな紳士の子供と住んで僕たちと同じものを食べて、ママのお金で買った服を着たりできる身分じゃないんだ。」(一章)

そして、彼はまるで「人殺しみたいだ」、「奴隷の監督みたいな」、「ネロやカリギュラみたいだ」、ジェインに書物を投げつける。ジェインの「頭は切れ、血が流れ鋭い痛みを感じた。」そして「恐怖が頂点を越すと、続いて別の感情が湧き起こった。この「別の感情」がジェインを奮い立たせ、ジョン・リードに掴みかかり、気違いのように反抗させたのである。そして「反逆を企てた奴隷のように、やけくそになったあげく、何でもしてやるぞという決心をさせるのである。」その結果、リード夫人はジェインをリード氏が最期を遂げた赤い部屋に閉じ込める。閉じ込められたジ

エインは自分に対するジョン・リードの乱暴な仕打ち、その妹たちのよそよそしき、その母親の毛嫌い、召使たちのえこひいきなど、「まるで汚ない井戸の底のどす黒い沈澱物をかき回すように」自分の周囲の人たちの自分に対する反感を思い起こすのであった。

勝手な殴打を加えるジョンに対しては誰一人たしなめる者もないのに、それ以上の理不尽な暴虐を避けるために反抗すると、家中のものがみんなだよってたかって非難を加える。

「不合理だ！ 不公平だ！」苦しい刺激によって、一時的ながらも大人びた力が呼びさまされ、わたしの理性はこう叫んだ。……もの寂しいその日の午後……どんなに胸は荒れ騒ぎ、反逆の思いにたけりたったことであるう。(二章)

こうしてジェインは暴君ジョンの暴力に対しては、暴力で反撃したのである。

一方、ジョンの母リード夫人のジェインへの精神的暴力——愛情を与えないで自分の子供と全く差別をし、召使

以下の扱いをし、その上性格上の欠点を挙げつらいジェイン本人にも自分が本当に悪い子供であるのではないかという思いを植えつける——に対しては、遂にジェインは言葉の武器を使って相手に反撃してしまうのである。

「リード叔父様が生きていらつしゃつたら叔母様に何とおっしゃるでしょう。」と言うのが思わず自然に出てきた叔母への詰問であった。……「何だつて？」とリード夫人は低い声で言った。彼女のいつもの冷たい落ち着いた灰色の瞳がおびえた表情でおののいていた。……「リード叔父様は天国におられます。そして、叔母様がしていらつしゃること、考えていらつしゃることすべてみていることができるのですわ。私のパパやママも同じようにできるのです。あなたが一日中私を閉じ込めたことも、わたしを死んでしまえばよいと思っっていることも、みんなご存知なのです。」(四章)

以上の言葉によってジェインは叔母に対して、二つの点で責めたてている。第一に、もし彼女の夫の自分の叔父が生きていたら叔母だつて今のように権力をふるって威張ること

ともできず、今の自分と大して違わない、夫から命令を受けるような身であったではないかということ、そして第二に、叔父が死ぬときにジェインを子供の一人として育ててくれるように叔母に約束させた、そのことを守っていないではないか、という二つの点からこれらの言葉はジェインの表面上の言葉の意味以上に、叔母に対して弱点を突く攻撃力となっているはずである。ジェインのゲーツヘッドでの反抗は、差別に対する反抗、奴隷が奴隷商人に対する反抗である。非常に攻撃的で、不公平、不平等なものへの体当たりの反抗である。

愛することも愛されることもなかった子供の魂の訴えが、ジェインの暴挙の奥には潜んでいることは一見してわかる。

この寝台には、私はいつも人形を連れて入った。人間というものは何かを愛さなければいけないものだ。それ以上にふさわしい愛情の対象がなかったので、わたしはちっぽけなかかしのような色あせた偶像を愛しいつくしむことに喜びを見出そうと努めた。それが半ば生きていて感性を持っているかのように空想して何ともぼかげた

真剣さでこのちっぽけなおもちゃをいとおしんだことか今思い出しても当惑してしまふ。それが寝巻の中に抱かれてないと眠れなかった。それが安らかに暖かそうにそこに横たわっていると、人形もやはり幸せなのだと思つて私はいく分か幸福になった。(四章)

ゲーツヘッドの人々の中で唯一人彼女の味方である女中のベッシーも彼女を庇護する役目には徹しきれてはいない。ジェインはベッシーに好意を持っており、ベッシーの方も彼女を憐れに思っているが、完全に包み込む母性的庇護をジェインに与えることはできなかった。ジェインが赤い部屋に幽閉されたときのことを次に引用してみることにしよう。

ときどきベッシーは指ぬきや鋏を探すために、また夕食のかわりに何か味つけパンやチーズ菓子などを持って来てくれるために、あい間を見て上ってきた。私がそれを食べている間に彼女は寝台の端に腰かけている。それから私を布団にくるみ、二度キッスしながら言う。「おやすみ、ジェインさん」そんな風に優しいときのベッシー

は、この世で一番善い美しい親切な人に思われた。そしていつもそんな風にな機嫌で親切で、癖みたくに私を小突きまわしたり叱ったり、理由もなくこき使ったりしなければどんなにいいだろうと心から願った。(四章)

そしてベッシーは「ジョージアナさまみたいに美人だったら同じ身の上でもっと心が動かされるのだけれど」と言つてジェインの容姿の醜さをいとこの美しさと比較するところがあるが、愛し子を抱擁する母性とはほど遠いものであった。ゲーツヘッドはジェインの家ではなかった。このゲーツヘッドでの「憤怒と自棄的な反抗心」(deep ire and desperate revolt) (四章)はこれからのジェインの人生の遍歴の核となっている。そしてすべてのストーリーの展開の中で、ジェインのここでの反抗は非常に重要な意味を持っているといえるだろう。

III

ゲーツヘッドでのジェインの叔母への直撃が引きがねとなってジェインは第二の家、ローウッドスクールへと送ら

れることとなる。「プロックルハースト氏はジョン・リドよりも男性的権威の恐ろしい表現である」と言われるように、ジョン・リド少年のように自分の弱さの裏返しし行為としてサディスティックな手段を使うようなまねはない。「低地の森」と名づけられたじめじめした谷にあるこの慈善学校で、正しいクリスチャンとしての忍従を身につけるようにという大義名分の元に、孤児たちは飢え、凍え、病んで死んでいく。プロックルハースト氏は「私の生徒に対する教育方針は、生徒たちを奢侈放縱に慣れさせるのではなく、剛毅、忍耐、克己の精神を養わせることにある。例えば食事ができなくなったとか料理法がまずいとか煮えすぎているとか、そういうったわずかな食欲の減退をきたす事件が起きてても、楽しみそこなつた食事の埋め合わせに、もっとおいしいものを与えたりしてせっかくの機会を無効にしまつてはなりません。かくては体を甘やかす、この学校の目的をそこねることになる」というのが、プロックルハースト氏の「まさに餓死しかけている人間でもたちまち気分が悪くなるような」焦げたおかゆに対する偽善的説明である。

ジェインをリード家での彼女を押しつぶそうとする力か

ら連れ出してくれたのは、皮肉にも飢餓と偽善とに満ちた学校の形式的戒律の中に彼女をまたもや閉じ込めるためであった。そして、この学校の生徒となるということは個性をすっかり抹殺されて「生きたメダル」(Living medals) (七章)の鑄型にはめられることである。しかし、ここローウッドスクールでのジェインの態度は次第にリード家でのものから変化を見せ始めてくる。彼女のこの学校での立場、描写は全体を通じて傍観的客観的調子に変わっている。

ローウッドスクールでの唯一の友、ヘレン・バーンズがサディステイックなスキヤチャード先生に集中攻撃を受けて、いじめられるのを見て、ジェインは彼女に次のように言う。

「もし私があなたのような目にあつたら、私はあの先生を嫌うわ。反抗するわ。もし先生が小枝で私を打つたら、私は先生の手からそれをひたたくてやるわ。そして、先生の目の前でその小枝をへし折ってやるわ。」

「……早まったまねをして、あなたに関係のある人たちに迷惑をかけるよりも、あなただけしか感じない苦しみを、じっと耐えた方がずっといいのではないかしら。そ

れに聖書にも、悪に報いるに善をもってすべしと教えてあるでしょう。……忍耐をしなければならぬのがあなたの運命なのに、それを我慢できないというのは、意志の弱いばかげたことだわ。」(六章)

ヘレンの言葉をジェインは「不思議に思いながら聞いていゝ、」そして「私には忍耐に関する彼女の教義を理解することができなかつた。まして彼女が自分を折檻した人に対して示した忍従は理解することも共鳴することもできなかつた」と、制御できない感情をあらわにして反抗心を武器にして戦ってきた今までの自分の感情の世界と余りにも違うヘレンの住む世界を見せられて、ただ茫然とするのであつた。

ジェインはローウッドスクールの全生徒と先生の目前でブロックルハースト氏から、「嘘つき」という烙印を押され、腰かけの上に半時間立たされ、一日誰もジェインとは口をきかないようにと指令される。衆目に晒され立たされるとき最高の恥辱の中で、さまざまな感情が湧き起ころり、呼吸が止まり、のどがふさがりかけたとき、そのそばをヘレン・バーンズが通り過ぎた。その眼の輝きにジェイ

ンは心打たれる。そして、「その眼には何という不思議な光が輝いていたことであろう。その新しい感情がいかに私をふるい起こしたとかか！ それはまるで殉教者や英雄が奴隸や犠牲者のかたわらを通り過ぎていくとき、ふっと力を吹き込んでいったようなものであった。私はつくりくる激情を抑え、頭をぐっともたげて、腰かけの上にしっかりと立つのであった。」ヘレンに信頼されることによって初めてジェインは自分の怒りをコントロールすることを学ぶ。

そして、ローウッドの生活でジェインに影響を与えたもう一人の人はテンプル先生である。バーンズという名が内に秘めた火のように燃える信念を象徴するように、テンプル先生は悪の力に犯されることのない聖なる神殿の象徴でもある。食べられない焦げたおかゆの代わりにテンプル先生は一存でチーズ付きパンを生徒たちに与える。このことを聞いたプロックルハースト氏はテンプル先生に対して、「あなたは彼女ら生徒の卑しき肉体を養われるかもしれぬが、そのためにいかばかりか彼女らの不滅の靈魂を飢えさせるかということについては少しもお考え下さらぬわけだ」と言うが、その言葉を聞いたテンプル先生は次のように描写されている。

テンプル先生は初め彼が話し始めたときには、うつむいておられたが今はまっすぐ前方を見つめ、大理石のような生来の青白い顔は、ほんものの石の冷たさと確固たる感じを呈してきたように思われた。ことにその口はそれを開くには彫刻家ののみによるほかはないかのようになり、きゅっと締まり、額はだんだん化石のように峻厳になってきた。(七章)

ジェインはヘレンを見ることにより、反抗心が無力化されるのを感じた。そしてテンプル先生はこの無言の抵抗を見ることがよって、決して攻撃的攻撃が圧力から逃れる唯一の効果的な力ではないことを理解するのである。受身的に見える無言の抵抗も無力には見えるが、精神的に相手に攻撃を加えることができ、それも人間の尊厳を守る一つの方法であるということを見てとった。ローウッドでのジェインの主な役割はテンプル先生とヘレン・バーンズとの人生に対する姿を見、意見を聞くという聞き手、傍観者そして質問者のものであることが多い。しかし、ローウッドスクールで学んだ受動的な反抗、そして実際的な教養、レディとしてたしなみが彼女が独立した人間となるための大

きな糧となった。そしてテンプル先生の母のような導き手としての役割も大きかった。テンプル先生はジェインに愛も吹き込んでくれた。これは今までの愛の枯渇の中にいたジェインにとってすべての贈物の中で一番の大きなものであった。ゲーツヘッドで彼女の愛情の唯一人の引き受け手であった彼女の人形も、ローウッドでテンプル先生に出会うことで必要がなくなった。自分が愛すべき存在であることを知るために先ず人から愛されねばならない。ここでジェインは大きな成長をしたように見える。ジェインはヘレンに次のように言う。「もし他の人が私を愛さないのなら私は死んだ方がましだわ。……ヘレン、私、あなたかテンプル先生か他の誰でもいい、私のほんとうに好きな人の真実の愛情を得られるのだったら、自分の腕の骨を折られても喜んで我慢するわ。」この愛し愛されることの喜びの芽ばえが次の場面ソーンフィールドで大いに花咲くのである。

先生が行っておしまになった日から、私はもはや以前の私ではなくなった。落ちついた気分も、ローウッドを

家庭のように思わせていたさまざまな連想も、先生ともにも消え去った。……私の心がテンプル先生から借りていたものをすべて脱ぎ捨て——というよりもむしろ私が先生のそばで呼吸していた、静かな晴れ晴れとした雰囲気先生が持ち去ってしまい——そして、いまや私は生れながらの自分のなかにとり残され、以前のいろいろな感情が湧き起こってくるのを感じていたのである。(十章)

IV

ジェインはローウッドスクールで身につけたものによつて家庭教師としての職をソーンフィールドで見つけ、ローウッドを脱出する。ここで完全に教育的にも社会的にも経済的にもリード家の世界から初めて独立できたのである。

ジェインが一貫して持ち続けているあの「憤怒と自棄的な反抗心」はテンプル先生とヘレンの影響を受けて、無言の抵抗へと変ったが、ヘレンの死、テンプル先生の結婚によつて、ジェイン自身の生まれながらの激情が再び目をさますのであった。ソーンフィールドにおいては、それは雇

主ロチェスターとの愛の関連において發揮されている。

ジェインはロチェスターとの身分の違い、自分の家庭教師としての立場を顧みず、ロチェスターに魅了される心を押さえることができない。

「美は見つめるものの目のなかにある」という言葉は、非常な真理である。主人の血色のない薄いオリブ色の顔、角ばった大きな額、太いまつ黒な眉、深い目、たくましい目鼻だち、きゅっと結んだ気むずかしい口元——精力と決断力と意志そのもの——これらは原則的には美しくはなかった。けれども私にとっては、はるかに美しさ以上のものであり、完全に私を支配してしまふような——自分の力の源泉から私の感情を奪い取って、彼の足もとに縛りつけてしまふような——興味と作用に満ちていた。(十七章)

ここでジェインは完全にロチェスターへの恋の虜になってしまっている。ロチェスターに支配されたい、愛されたいという願望がそこには存在している。それがジェインの自然の感情に違いない。美しいイングラム嬢とロチェスター

が結婚しないことがわかり、ジェインにロチェスターが結婚を申し込む。そのときも彼女にとって彼は偶像以外の何物でもない。

ちょうど日食が、人間と、まばゆい太陽とのあいだをさえぎるように、彼は私とあらゆる宗教上の觀念とのあいだに、立ちふさがっていた。そのころ私は神のおつくりになった一人の人間に心を奪われていて、神の姿を見ることができなかった。——その人間は私の偶像になっていたのである。(二十四章)

しかし一方では、「自分の心を省み、その思考や感情を調べ、道ひとつない涯しない想像の荒野をさまよっている心を、しっかりと手で安全な常識の羊小屋の中へ連れ帰ろうと努め」てもいるのである。

ロチェスター自身、ジェインの恋心をつのらせるような種々のテクニクを弄している。例えばイングラム嬢と結婚するとジェインにも周囲の人々にもすっかり信じさせ、ジェインにそのためにソーンフィールドを去る気にまでさせたたりする。また、今までの彼の恋の遍歴を包み隠さずジ

エインに話すことによつて、正直な自分自身の姿をジェインの前にさらけ出し、彼女自身の正直な心の共鳴を得ようとしている。ジブシー女に変装して彼女の本心を探り、自分に対する気持を確かめようとしたりもする。しかし、ロチェスターは今までの恋の遍歴をジェインにすべて打ち明けているかに見えたが、ジェインとの結婚式の日に暴露されるその日まで、気狂いの妻バーサを屋根裏に閉じ込めていることを隠している。これらすべての行為の動機が善意であれ故意のものであれ、ロチェスターはジェインを恋の奴隷にするためのでき得る限りの道具だてを使っているのみなされても当然と思える。ロチェスターが仕掛けた恋の罠にすっかりはまつてロチェスターへの情熱の虜となつてしまつたジェインではあるが、一方では彼を偶像視しつつも、他方では次のように反撃する。

私があなたにとつて何の意味もないものとなつてもなおここにどまつていられるとお考えなのですか？ 私を自動人形だとお考えなのですか？——感情もたぬ機械だとお思ひになるのですか？……私が貧乏で、名もない身分で不器量でちつぽけな女なので、魂もなければ愛情

もたないとお思ひになるのですか？ たいへんなお考え違いですわ！ 私もまた、あなたと同じように魂を持ち——あなたと同じように愛情を持っているのです！……私は習慣とか世間並みの方法とかそんなものを仲介に、いいえ、この肉体の仲介を通してさえもお話しているのではありません。あなたの魂に話しかけているのは、私の魂なのです。ちやうど私たち二人がお墓の中を通つて神様の足もとに立つたときと同じように平等に——ありのままに」(二十三章)

彼女はここでロチェスターに神のもとで対等であることを訴えている。そして「私は鳥ではございません。私は網にかけられるわけではございませんわ。私は束縛されぬ意志を持った一個の自由な人間なのです」と言つて、同時に自由な意志を持った人間であることを主張してロチェスターに抗議している。

また、彼女の自立への強い欲求は彼女が今まで心の中に抱いてきた強い反抗的衝動を刺激し目ざめさせる。ロチェスターがジェインに正式に結婚を申し込み、世間に対して彼女を認めさせようと、サテンとレースの服を着せ、髪に

バラの花をつけさせ、豪華なベールをかぶらせて結婚式に臨ませようとする。そして新婚旅行にパリ、ローマ、ナポリ、フロレンス、ベニス、ウィーンにも行こうと言うロチエスターに対して、ジェインは大喜びするどころか冷静に次のように反撃を加える。

あなたは、しばらくの間は今のままのあなたでいらっしやるでしょう——ほんのしばらくの間は。それから冷たくなります。気まぐれになります。次にはとても気むずかしくなり、あなたのご機嫌をとるのにずいぶん骨を折らなければならなくなるでしょう。けれども、私というもの慣れて下さったら、ふたたび、私がお気に召すようになるとは申しません。あなたのお気に召すよう愛して下さるようになるのは、六ヶ月、あるいはもっと短いあいだ燃え立っているのは、六ヶ月、あるいはもっと短いあいだだろうと存じます。夫の熱のさめない期間は最大そのくらいなものだとある人の書いた書物で見たことがございます。でも結局お友達としても伴侶としても自分のいいとしい旦那様に嫌われる身にはなりたくないと思存じます。(二十四章)

これを、初恋の人から結婚を申し込まれて心打ち震え、喜び一杯の乙女の言葉と誰が言い当てることができようか。ロチエスターがジェインを自分の花嫁として思いのままに飾ろうとするのは、ジェインにとっては彼女を縛り圧する力の他の何ものでもなかった。ロチエスターが結婚の準備のために絹や宝石を買ってくればくれるほど、ジェインは「当惑と屈辱」(A sense of annoyance and degradation) (二十四章)を感じるのである。

ロチエスター様に人形のように着せ飾られたり、毎日身のまわりに黄金の雨を浴びて、第二のダネイ姫かなにかのように坐らされているのは我慢ができない。家へ帰ったら早速マデライアへ手紙を書いてジョン叔父に、私が結婚しようとしていること、それからその相手のことを知らせよう。もし私が他日ロチエスター様のもとへ財産相続権を持つてくることのできる見通しだけでも得られたら、いまお世話になっていることも、ずっと我慢しやすくなるに違いない。(二十四章)

ロチエスターがジェインにしようとしていることはジェイン

ンには自分を彼の持ち物として考えることだとしか思えない。彼女は妻として、第一に精神的自立を望み、第二に経済的自立を望んでいる。

「私はただ気楽な気持ちでいたいですわ。十重二十重の恩義で押しつぶされたくないのです。セリーヌ・ヴァランスについておっしゃったことを覚えていらっしゃいますか？——あなたが彼女に贈ったダイヤモンドやカシミヤ織りのこと。私はあなたのイギリスのセリーヌ・ヴァランスにはなりません。私はやはりアデールの家庭教師のままです。それによって、私のお食事も住宅もいただし、年に三千ポンドの給料も稼ぎます。そのお金の中から、私は自分の衣服も整えます。ですから私に何一つ下すってはいけません。ただ——あなたのご好意以外は。」(二十四章)

ここでジェインの見せるかたくななまでの、夫から精神的経済的自立をしたいという考えは、生まれながらの彼女の持っている彼女自身、彼女を圧迫し閉じ込めようとす力をはねのけ跳び出したいという欲求と大きく関係して

いるように思われる。たとえ、その力が愛の枷という姿をとっても彼女がその力から逃れたいと思うのは同じである。そして自立という形でかろうじて自分を保とうとするのである。

更に彼女に課せられた圧力は、結婚当日ロチエスターにバーサという狂気の妻がいることが暴露された結果、ロチエスターがそれでもジェインに法律的には許されぬ自分の愛人となってそばにいてほしいと望むことである。妻であるためにさえ精神的経済的自立を望んでいるジェインにとって、その要求はどんなに彼女を束縛する力であることか想像に難くはない。

私は恐ろしい試練を受けていた。灼熱した鉄の手が私の心臓を掴んでいるのだ。恐ろしい瞬間であった！血みどろの戦いと暗黒と火炎に満ちた瞬間であった！おそろくこの世に、いま私が愛されている以上に愛されたいなどと望みうる人間は、かつて一人もいなかったであろう。そして、こんなにも私を愛している彼を、私は絶対に敬慕しているのだ。しかし私は愛と偶像とを投げ打たねばならなかった。去れという敵しい一語の中に、私の

せつない義務は含まれていた。(二十七章)

ジェインが愛人としてロチェスターのもとにいるということは彼女の望む対等の関係を失うこととなる。ロチェスター自身、「情婦を囲うという事は奴隷を買うことに次いでよくないことだ。情婦も奴隷も、しばしば性質が劣等だし、地位も必ず劣等だ」(二十七章)とさえ言っている。そして、遂にジェインはロチェスターのもとを去るという決断を自分に下させる。

私は自分が大事だ。孤独であればあるほど、友もなく庇護もなければないほど、ますます私は自分を尊敬する。私は神によって与えられ、人間によって認められた法律を守る。私は自分が正気で狂っていないとき——今の私のように——私が受け入れた道徳を守る。法律や道徳は誘惑のないときのためにあるのではない。肉体と魂が法律や道徳の峻厳に対して反逆したとき、そのようなときのためにあるのだ。法律や道徳は厳酷なものである。それは侵されてはならぬ。もし自分一個の便宜のためにそれを破っていいものなら、その価値はどこにある

う。それは価値あるものだ。——私はいつもそう信じてきた。(二十七章)

ジェインはロチェスターの愛人になって贅沢で怠惰な生活をすることを拒否して、あえて社会の道徳に従うことを選ぶ。「もし全世界があなたを憎み、あなたを悪人だと信じたとしてもあなたの良心があなたの正しいことを証明し、無罪を言い渡すのだったら、あなたは味方がないわけではないことよ」(八章)と言ったヘレン・バーンズの言葉がジェインの心の奥に根づいていたのであろうか。

V

ジェインはこうしてソーンフィールドを去ることとなるが、ソーンフィールドで家庭教師をしていた間に、叔母のミス・リードが重体だという知らせを受け、一度リード家を訪れたことがある。このシーンはジェインの成長を具体的に見せるものとして重要なものである。ゲーツヘッドを去る直前に叔母にむかって、「私は一生涯、決してあなたを叔母様とは呼びません。私が大人になったら、二度とあ

なたを訪ねるようなことはしません」(四章)と言った言葉に反して、息子ジョンの乱行の末の自殺によるショックで卒中で倒れた叔母を見舞うために、ジェインはゲーツヘッドを訪れる。九年後にゲーツヘッドを再び訪ねて次のように思う。

今もなお私は地上のさすらい人のような気持であったけれども、しかし、自分自身に対しても、また自分の力に對しても、ずっと強い信頼を持っており、圧迫の恐怖にもたじろぐことはなくなっていた。私の受けた虐待の傷口も今は全く癒え、怒りの炎も消えていた。……ときが復讐心を和らげ、憤怒や反感にはやる心を静めてくれるのは、ありがたいことである。私は憎悪に燃え、痛ましい思いで、この女のもとを去り、そして今は彼女の深い苦悩に對して一種の同情を抱き、かつてのひどい仕打ちを一切忘れて許そう——和解し合い、睦まじく手を握り合おうとする強い願望を持って彼女のもとへ帰ってきたのである。(二十一章)

すべてを水に流し、叔母と和解しようと思つて帰ってきた

ジェインに、九年の歳月だけでなく、彼女がその間に受けたさまざまな苦勞経験が彼女をして心からそう思わせたのである。しかし、現実には彼女の望む通りには進まなかった。

私はかつて彼女を二度と叔母様と呼ぶまいと誓つた。けれども、今はその誓いを忘れ破ることが罪に価するとは思わなかつた。私の指はシーツの外に出ている彼女の手を握りしめた。もしも彼女が優しく握り返してくれたなら、そのとき私は心からの喜びを感じたに違いない。しかし、感受性に乏しい人間は、すぐには和らいだ氣持になれず、生來の反感はそうすぐにはぬぐいとることができなかつた。リード夫人は手を引っ込め、顔をそむけ、今夜は温いね、と言つた。再び彼女は冷やかに私をながめた。私はすぐに、私に對する彼女の見解——私に對する感情——が、變つてもいなければ變るべくもないことを感じた。私は、その石のような目——優しい魂に對して曇つており、涙によつても溶けることのない目——を見て、彼女が最後まで私を悪く思おうと決めていることを知つた。私を良い人間と信ずることは、彼女に寛容の

喜びを与えるどころか、ただ屈辱感を与えるにすぎなかったからである。(二十一章)

相手が自分に対して九年前と全く変わらぬかたくな強い嫌悪の情を抱いているのがわかったとき、逆にジェイン自身は九年前のジェインに比し精神的にいか成長を遂げたかはつきりときわだたせられている。その意味で、ソーンフィールド在住の中間地点でジェインの個性の原点に戻ってその成長度を確認した後で、愛人となることを拒否してソーンフィールドを去るという意味が、単に反抗のための反抗ではなく複雑な要素を考えた上での逃亡であるということがわかるのである。「ジェイン的成長小説」という意味からも大きな意味をもってくる。

VI

ソーンフィールドを自ら棄て、ジェインは今までの旅の中で最も厳しい苦難の旅に出ることとなる。乞食同然の流浪の旅の果て、たどり着いた所がセン・ジョン兄妹の家であった。そこは、マーシユエンド(沼地のはずれ)とか、ム

ーア・ハウス(荒野の家)などと呼ばれているところであった。兄妹の篤いもてなしを受けやると一時の非難場所を得て、そこで小学校の先生という職を得ることができ。またもやある意味で運命的相手、セン・ジョン・リヴアーズと出会い、彼をジェインは次のように描写している。

彼は打ちとげにくい、何かに心を奪われているような、いつも何かを思い煩っている人のようにさえ見受けられた。牧師としての勤めには熱心で、その生活や習慣には非難すべきところはなかったけれど、彼には真摯なクリスチャンや、実践的な博愛家の当然の報酬であるべき精神の安らぎや、心の満足を羨しむふうがなかった。(三十章)

偶然の出来事から、このセン・ジョンがジェインのいとこであると判明し、ジェインは叔父の遺産を相続することとなるという、少々作者が仕組んだデューエマキナーの要素が出てくる。しかし、このムアーズエンドでの問題点は、セン・ジョンが彼女のいとこであったとか叔父の遺産が入

るようになったとかということではない。セン・ジョンがジェインの二人目の求婚者になったということである。セン・ジョンは彼女の内から湧き起るあの誰にも庄されることのなかった自由を奪い、鉄のような主義で彼女を囲い込もうとしたのである。そして不思議にも、へびににらまれたかえるのように、ジェインはその力に抗することを忘れてしまふのだった。

私は愚痴をこぼす勇氣はなかった。不平を言ったりすれば、彼を怒らすに違いないことが、わかっていたからである。いかなる場合でも困難に耐えることは彼を喜ばした。その逆は、ことのほか嫌がられた。……彼が極めて忍耐強い、寛容な、しかもやかましい先生であることを私は知った。彼は非常にたくさん勉強することを私に期待した。そして、私はその期待を満たすと彼一流の表現でおほめの言葉を与えるのであった。彼は私の心の自由を奪うほどの、ある種の権力を、次第に私に対して持つようになつた。彼の称賛と注意とは冷淡にされるよりも、もっと窮屈なものであった。彼がそばにいと、私はもはや自由に話したり笑ったりすることができなかつた。

た。……すべてを凍りつかせるような魔力に私はかかっていた。彼が「行きなさい」と言えば、私は行き、「来なさい」と言えば、私は近づく。「これをしなさい」と言われれば、それをする。けれども私は奴隷のような役割を好んではいなかった。(三十四章)

ジェインは完全にセン・ジョンの魔力にかかつてしまった。「奴隷の鎖」(Chain) (三十四章) に繋がれ「自分の性質を半分押えつけ、自分の才能を半分押し殺し、自分の趣味を本来の傾向からねじ曲げて、生れつきぜんぜん適していない仕事を、いやでも選ばなければならぬ」という感じが、日ましにつのるばかりであった。彼は、私などどうてい行けそうもない高い所へ私を引き上げる訓練をほどこしたがつた。彼が連れて行こうとする標準まで上ろうとして、私はたえず身のよじれるほど苦しい思いをした」とまですべて書いている。そして、セン・ジョンは心では美しいミス・オリバーに引かれつつ、その気持をおさえてジェインを妻として選び、協力者、助手として自分と共にインドに行くようにと要求する。そして次のように言う。

神と自然はあなたを伝道師の妻にするつもりであった。彼らがあなたに与えたものは、容姿の美ではなく、知的な能力であった。あなたは勤労のために形づくられたのであり、恋愛のためにつくられたのではない。あなたは伝道師の妻になりなさい。私の妻になるのです。私はあなたを要求する——私自身の快樂のためではなく、私の天帝に仕えるために」(三十四章)

ジェインの「心と魂の自由」(三十五章)を求める態度はセン・ジョンに対して「あなたは私の心など必要ではないのです」(You do not want my heart)(二十五章)と言い放つことによって彼の結婚の申し込みを拒絶する。この叫びは今まで彼女の個性を終生支えてきた「心と魂の自由」を守るために、圧する外力に己が力の限り抗してきた衝動の表れに他ならない。

私は彼の背の高い堂々たる容姿をながめた。そしてこの人の妻としての私を心の中に描いてみた。おお！ どうしても私はいやだ！ 彼の助手としてなら彼の仲間としてならすべて問題はなかった。その立場でなら彼とも

に大洋を越えていこう。東洋の太陽の下で、アジアの砂漠で彼とともに、その職務に励もう。彼の勇氣と献身と強烈な精神力とを称賛し自分の模範としよう。おとなしく彼の専制に服従し、彼の限らない野心にも快く微笑しよう。……私の肉体はむしろ嚴重なくびきのもとに置かれるだろうけれど、心と魂は自由でいられる。また、私のためにまだ枯れしぼまされていけない自分を、ときどき願みることもできるし——一人いるときには、生来の捕われぬ自然の感情と語り合うこともできるだろう。私は自分の心の中に、私だけの、彼も踏みこむことのできぬかくれ家を持つだろう。……しかし彼の妻として——常に彼のかたわらにあり、常に束縛され、常に押えつけられて——自分の生来の情熱の火をいつも控え目にしか燃やしつつけることが許されず、その閉じ込められた炎が次々に内臓を焼き尽くしていても、泣き声を上げることすら許されぬとは——それはとても耐えられない。(三十四章)

そして、「私はあなたが与えて下さるといふまがいのもの愛情を軽蔑します。そうですとも、セン・ジョン、あなた

がそんな愛を下さるとおっしゃるなら、私はあなたを軽蔑します」（三十四章）と反撃したのである。彼女は自分の内に燃える生来の情熱を結婚する相手に燃やし愛することができないのであったら、それは自殺するのも同然であった。この考えは彼女が子供の頃から一貫して持ち続け、自分で納得できない外からの力に対抗してきた、内から湧き起こる力である。確かにジェインは最初は悪魔の魔力に魅せられるように服従していたが、彼女の湧き上る「決然とした荒々しい自由へのあこがれ」がセン・ジョンの彼女を閉じ込め自分の所有物としようとした力をはねのけたのである。その力はちょうどロチェスターの許から飛び出し、放浪の旅に出たのと同じものである。

すべて才能ある人というものは、感情家であるか否にかかわらず、また熱狂家、野心家、暴君であるかにかかわらず——真摯でさえあれば——人を心服せしめ、統御するとき、必ず崇高なものを示す一瞬があるものである。私はセン・ジョンに畏怖を感じた——その畏怖はあれほど長い間避けつづけてきたものに、忽ち私を追いやったほど強いものであった。私は彼との戦いを放棄し

ようとする誘惑——彼の意志の激流に身をまかせ、彼の生涯の深淵に落ち込み、私自身の意志を捨てようとする誘惑を感じた。以前、別の形で、別の人によって経験させられたときと同様、私は彼のためにはほとんど動きがとれない程押えつけられてしまった。二度とも私は愚かだった。あのとき屈服していたならば、信念を守れぬ誤りを犯すことになっただろう。今、屈服すればそれは判断をあやまる過失を犯すことになる。（三十五章）

VII

結論は案外と早くやってきた。どこからともなく「ジェイン！ ジェイン！」という叫び声を聞いて、ジェインは「行きます！ お待ち下さい！」と言ってロチェスターのもとへ帰るのである。ソーンフィールド館は狂人バーサによつて焼かれバーサも炎の中で死に、それを助けようとしたロチェスターが失明し、片手を失った不具者となつてゐることを聞く。早速不具になつたロチェスターのいるファインディーンの別邸へとジェインはかけつけ、彼から真の意味で自立し、その上で夫である彼を助けるという彼女の

求め続けてきた精神的、経済的自立の上に立脚した愛という理想の形を達成する。

ジェインとロチエスターの会話を次に挙げてみよう。

「お金持ちになつたばかりでなく、私は独立していると申し上げたではございませんか。私自身が私の主人なのです。」それで、わたしと一緒にいてくれるのかな？」「はい——あなたさえ、おさしつかえなければ、私はあなたの隣人にもなり看護婦にもなり、家政婦にもなりません。あなたのお相手にもなりますわ。……生きている限り、私はあなたを置き去りにはいたしませんわ」(三十七章)

そして、「毅然として独立の状態にいらつした時代のあなたよりも、私がほんとうにあなたのお役に立つことのできる今の方が、より強くあなたを愛しています」とロチエスターに宣言する。そして彼女が生まれながらに持ち続けてきた「心と魂の自由」は何の束縛も加えられず、いわれなき圧力からも解放され、人間と人間の関係のあるべき姿を実現していくのである。このときに至って初めて、ジェイ

ンの成長は成就したといつてよいだろう。しかし、その成長の過程にあって、彼女をして人生の苦難に対して避けひるますことのなかつたのは——各段階によって対象は変わっていくけれども——あの決然として庄する力に抗議し、反逆していく、「心と魂の自由」を求めて止まない内なる衝動であつたことを忘れてはならないだろう。

こうして考えてみると、ジェインという女性は実に強い女性である。小説の初めから自己の存在を他に対して主張し続け通している。その意味で、自己の実現を求めて旅をする(実際の旅行だけでなく人間を知っていく精神的旅をも含む)成長小説と、この「ジェイン的成長小説」(と私が最初から名づけたが)とは種類を異にしている。彼女は自分を探す遍歴をしたのではなく、もともと彼女の中にしっかりと存在している自己の心と魂を解き放してやる旅をこの小説の中で行つたのである。それは決して一人でできるものではなく、人間同士のものよりよき関係の中で初めて成立するものだといふことを教え、一方で経済的自立もその心と魂の解放には必要条件であるといふこともこの小説は教えている。しかし、やはり女性である以上、偶像によって支配されたいという揺れるような心の動きもかい間見ること

ができた。果たして、作者シャーロット・ブロンテが主人公のそのような心の揺れをどの程度伝えているとしたか、この小説を読む限りたゞおぼえてははつきりと断定することはできない。

注

- (1) David Cecil: *Victorian Novelists*, Chicago: University of Chicago Press, 1958, pp. 101-5.
- (2) Gaskell 一八四八年一月十二日レイズ宛。
- (3) Paul Meissner: *The History of English Literature, III, Romantic and Victorian*, Berlin, Walter de Gruyter & Co., pp. 116-17.
- (4) Clement Shorter, ed.: *The Brontës' Life and Letters*, New York; 1908, vol. II, p. 64.
- (5) Edger F. Shannon, JR.: "The present Tense in "*Jane Eyre*", *Nineteenth Century Fiction*, no. X (September, 1955), p. 143. 以下「reader」云々の語句は、*Jane Eyre* の「reader」を指して読者としての時の転換が可能となり、作者が望む効果をあげようとするのである。
- (6) Norman Collins: "The Independent Brontës," In *the Facts of Fiction*, pp. 174-88, London, Victor

Gollancz.

- (7) J Millgate: "Jane Eyre's Progress", *English Studies*, vol. 50 (1969), p. xxi.

- (8) Helene Moglen: *Charlotte Brontë: The Self Concealed*, The University of Wisconsin Press, 1984.

日本語の訳は新潮文庫大久保康雄氏訳を参考とした。